郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

特集／結婚への招待

9月号

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO SEPTEMBER 1961 NO.7

Hino
コンテッサ
神戸日野自動車
TEL. ④5771～5

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です

神戸の女性

環境衛生は
ゴミ箱から！

フタがキッチリしまるので、ハエやゴキブリがはいりません。ツギ目がないから洗たくもOK…ポリペールは衛生的なゴミ容器です。神戸の環境衛生は清潔なゴミ箱からおはじめください。

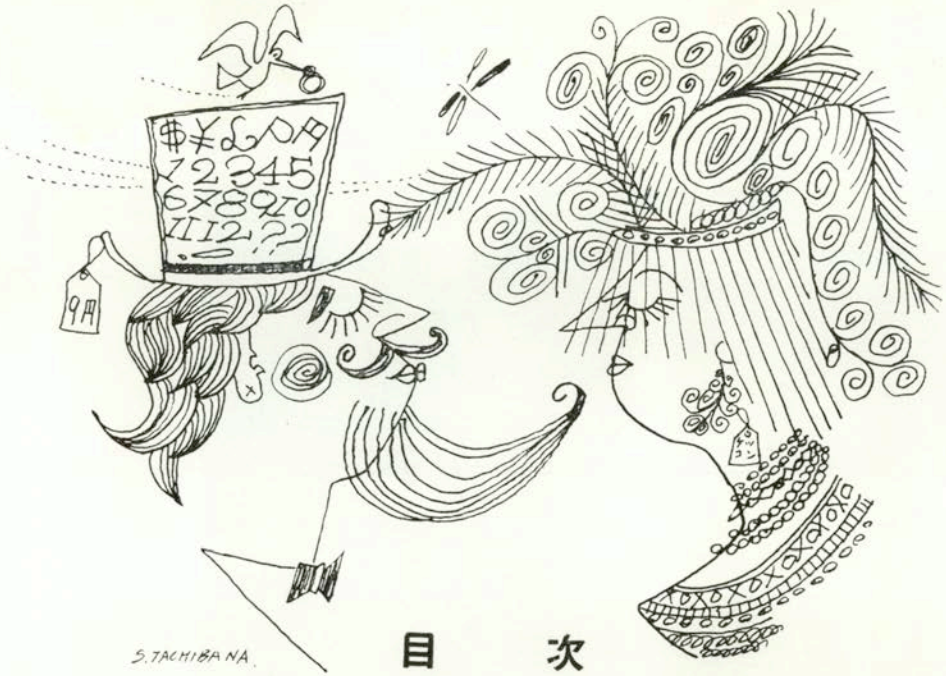
〈小売価格〉
1800円

硬質ポリエチレン製
新家庭にぜひお備え下さい

セキスイ

ポリペール

プラスチックの積水化学



目　次

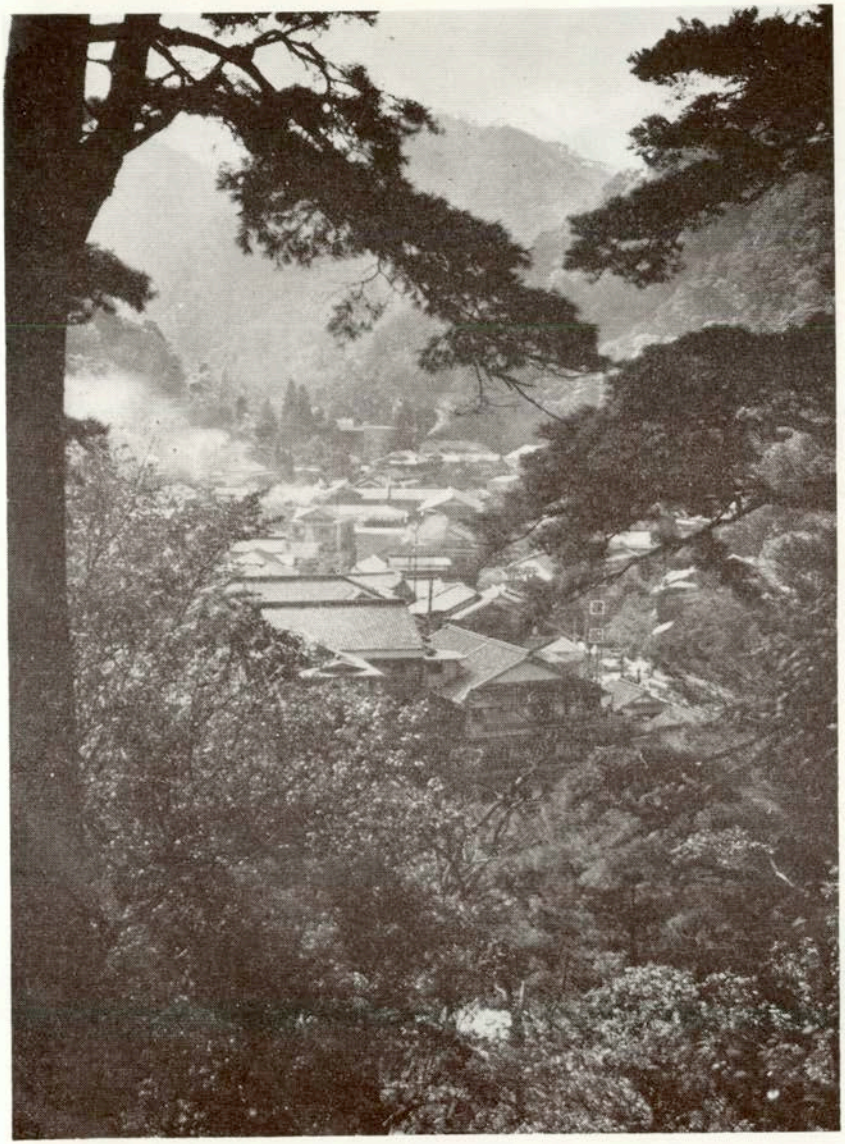
PHOTO／神戸の女性①・杉尾友士郎　1
連載⑥「ここに神戸がある」
有馬の湯・司馬遼太郎　4
れんさい随想③／妻への尊敬・阪本勝　8
わたしとこうべ・戸塚文子　10
大人のマンガ／佐々木かんじ　15
映画戯評／スパルタカス・名村喜久江　16
花時計・レリーフ／青木重雄・伊藤誠　19
うまいものシリーズ 恋が芽生えるテイールーム　20
KOBEKKO SHOPPING GUIDE　23
26　結婚特集／写真と詩・慶びの日
28　特集①座談会・結婚への招待
福富芳美・服部正・福井達郎
34　特集②／座談会・挙式の計画は
こんなにしましょう
38　写真／旅立ちの装い・愛のプレゼント
43　特集③／アンケート・新婚旅行の計画
45　ピンクコーナ／（T）
49　コント「ボーイフレンド」早瀬圭一
50　随想しあわせな家庭・磯江朝子

表紙／中西勝・写真／米田定蔵・杉尾友士郎・デザイン／橘昭三

連載第6回

ここに神戸がある

司馬遼太郎
え 中西 勝



写真・湯けむりたつ泉郷有馬・提供神戸電鉄

有馬の湯

なるべく仕事を少なくしょうと思って、気の張る短編の仕事などは、月に一つ以上は書かないことにきめていたのだが、計画上の思いちがいが重なって、この八月に短編と中編を四つも書かねばならないハメになった。八月のへき頭、その量を思うと、さすがに怠け者の小生も、気が遠くなりそうだった。

例によって神戸っ子の五十嵐さんから電話がかかってきたとき、

「この月は、ほんまは、かんにんしてほしいねん」

と弱音を吐いたが、五十嵐という人は、そういうことに同情するような女性ではなかった。「あきません」といった。

「そのかわり、有馬にしてあげます」

「ほう、有馬。あれは神戸市かいな」

「神戸市ですとも。神戸市に編入されてから、新たらしくボーリングをして、湯の温度も九〇度になったし湯量もふえているんです」

「わかった」

私は、そこまで仕事をもってゆくことにした。

「そのかわり、こんどだけは、たれも案内なしで行ってくる。宿屋だけはきめておいてください。なるべく、創業の古い宿屋がいい」

そういうわけで、私は、重い資料をボストンバックにつめこんで有馬のH旅館に行った。

車をおりて、「司馬です」と宿の老人にいうと、ややふしんげに私と案内者の人相をみて、「そういうお名前の予約は承っておりません」という。われわれは荷物をもち、暑い玄関の外に立たされたまま、不審尋問（？）に答えねばならなかった。女中さんたちが、ぼう然とわれわれを見ている。こういう所が、日本式の宿屋のいやな所だと思った。

やっと、不審が晴れた。私の姓が、電話で伝えられたために、「志賀」と聞きまちがえたのだということだった。志賀という日本の作家は、志賀直哉氏のほかはいないから、私はよほどの老人とまちがえられたわけである。

部屋は二階で「滝川」に面した風情（ふぜい）のよさそうな部屋だった。ここまで案内してくれた五十嵐、小泉両氏は、

「この宿は、有馬ではいちばん古い宿です。ここは旧館で、いま別の場所に別館がたっています。ケーブル・カーまであるんです。でも、古い宿とおっしゃったもんですから、旧館をとっておいたん

です」

「それでよかったんです。ここはいい」

しばらくして、両氏は神戸へ帰って行った。私は仕事を始じめた仕事のキリメをみつけて、有馬取材のために町へ出るつもりだったが、どうしてもキリメがみつからず、ついに翌朝、宿を辞去するまで、宿を一歩も出ずじまいだった。

(これでは、五十嵐さんに悪いな)

と途中で考えて、夕食のとき、酒をすこし飲みながら、係りの女中さんにきいてみた。有馬やこの宿のことを書いたパンフレットを一そろい持ってきてくれと頼んだが、宿の宣伝用のそれが、一枚あるきりだった。そこに「創業七百年」と書いてあるが、それっきりであとは、女の人が浴室でツカっている写真と新館のケーブル・カーの写真が出ているだけだった。

こんなケーブルなら、ほかの温泉郷にもあるし、温槽で婦人が浸っている写真をみて　欲情して大阪・神戸からやってくるばかはないだろう。なんと、宣伝下手なパンフレットか、とおもった。有馬の特徴は、京阪神の都心圏のすぐそばにありながら、なお古色を残している所にあるのだ。

古風な建物をたてよ、ということではない。この泉郷が、奈良朝平安朝以来、中央の貴顕紳士の湯治場として愛され、宿も、いまだに何々坊という名を残しているように、それぞれが数百年の伝統をもっているはずなのである。それが一行も出ておらずに、ケーブルカーばかりが大いに派手に印刷されていた。全国の温泉でもまれなその特色を、この土地は、むぞうさに捨てているようである。

「このほかないの」

「ないんです」

「この宿の名のオコリはどういうことやろ」

「むかし黒田官兵衛という人がつけてくれたそうです」

しかたがない、とおもって、

「あんまをよんでもらいます。男の人で、なるべく土地にふるく、話好きな人を」

女中さんはすぐ帳場できいてくれたが、その条件にあう人は、いま六甲に仕事にでかけていて、いない、ということだった。やがて五十年配の男のあんまさんがきた。私は療治をもらいながら、

「もう、有馬はお古いんですか」
「いや、まだ五年です」
これでは、どうしょうもなかった。
じつをいえば、私は有馬にいままで縁がなく、たった三つの知識しかもっていなかった。一つは、行きがけに女房が、「パンマがいるそうよ」といったことである。
それをこの男のあんまさんにきいてみると、言下に否定した。
「他の温泉にはいるのですが、ふしぎとここはいません」
もう一つは、ヌード・スタディオがあるということだった。その存在の有馬を女中さんにきいてみると、これは肯定した。
「でも、つまらないんですって、もっとそういうものをこの町に入れればお客が来るというんですけど」
「それは迷信ですよ」
と私はいっておいた。わざわざ高い金と無い時間をさいて温泉場にヌードをみにくるあほうはないだろう。そういう興行や淫蕩なふんいきで客をつるという精神が、もし将来の有馬の有力者のなかにきざしたならば、ほどほどがいいといいたい。客は色情狂ばかりではないのである。
第三番目の有馬知識は、足利家の幕将赤松則政の支流の子孫で、戦国初期に赤松与次郎則景という者がこの摂津国有馬郡を領し、有馬氏と名乗り、のちその子孫が居城を播州三木に移したり、同淡河に移したりしたが、依然としてここを領し、豊臣秀吉の時代になってから帰伏して遠州横須賀三万五千石に移封され、のち徳川家康につかえ、大阪夏ノ陣ののち、久留米二十一万石の大大名になった。明治以後、この家は伯爵となり、いまの当主は、作家の有馬頼義氏である。と思いだしながら、ふと、有馬頼義氏は、自分の姓のオコリであるこの有馬温泉にきたことがあるだろうかと考えたりした。
女中さんにきくと、宿の主人は、いま新館の経営に力を入れているそうで、そのせいか、この旧館の私の部屋などは、紙障子が点々とやぶれていた。それがいかにも、有馬のこんにちを象徴しているように思われた。
あと十年さきにはどういうことになるのだろうと思いながら、仕事の筆をやすめて、窓から外をのぞくと、いかにも眺望のよさそうなこの部屋から、なにも見えなかった。視野を、鼻さきで、製薬会社のようなビルがさえぎっていたのである。
それも、宿の一つだそうだ。窓に人影がないから不審におもってきくと、女中さんは、なにも答えてくれなかった、なにか、客のいない理由があるのだろう。
とにかく、有馬は涼しかった。仕事もすすみ、朝の寝醒めも快適だった。こんど、もう一度、あそびに来ようと思った。

れんさい随想③

妻への尊敬

阪本　勝

日本中の雑誌で、わたしがいちばん可愛いいと思いこんでいる雑誌は〝神戸っ子〟だ。なぜそんなにほれこんだか、理由はトントわからない。ただ編集長のミス・イガラシの熱誠と努力と、あのザックバランな態度にみせられたとでもいおうか。

さて今月号は〝結婚特集号〟との仰せだ。これなら、タネは富士山の百倍ほどあるし、何でも書けるし、書いてもみたい。読者のみなさんを喜こばせたり、笑わせたりする材料はいくらでもある。しかし、きょうは、すこしまじめな話を書かしてほしい。

◇

わたしは、いまの妻と三十八年前に結婚した。いわゆる親族結婚で、実姉の亭主（養子さん）のメイにあたる岐阜県の田舎の農家の娘だ。

だから夫婦生活は、たんたんとして過ぎ、思想的な争いもなく、平凡に今日まですぎてきた。

小説などには、夫婦間のあつれきみたいなものを、いかにも真剣に取り扱っているのを読む度びに〝あほかいな〟と思っていた。だからわたしは今日まで妻を軽べつしたこともなければ、尊敬したこともない。

それほど世にもあわれな平凡な歳月が続いた。

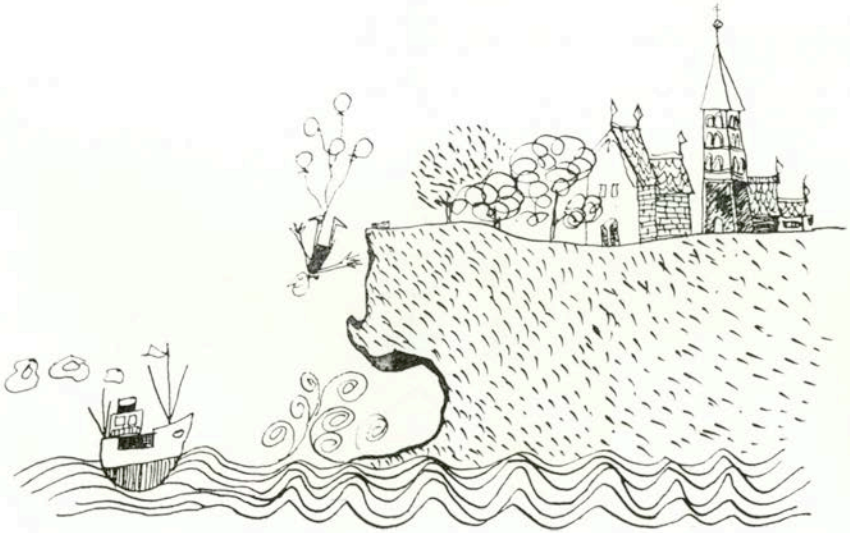
◇

ところが、ここにひとつの異変が起った。

みなさんもご存知のとおり、わたしは十七才のひとりむすめ〝阪本小弓〟をつれて、七月十五日から八月三十日まで、十三ケ国、二十三都市を訪れて先日帰ってきた。印象、感想、思想などは頭のなかにいっぱいだ。だが、そんなことをここで詳しく書く紙数もない。

ひとことだけここで書く。スウエーデンという北欧の国は、世界中で社会保障制度ではずばぬけてすぐれている国であることは有名だ。しかし自殺者の多い点でも世界中第一だということも周知のことだ。

老後安楽にして何不自由なく暮し得る国民が、なぜそう自殺をするのか。



この疑問が多年わたしの頭にひっかかっていた。そこでかの国の元大蔵大臣で、侍従長をつとめたこともあるディクソン博士と、二回にわたり、四時間ほどしんみり話しあった。

博士いわく「社会保障はりっぱな美しい思想だ。しかしその反面を見たまえ。個人主義、利己主義…つまり自分の生活だけが安全なら、他人や隣人はどうでもいい、という考え方に陥ってしまう。ストックホルムの市中をごらんください。希望も目的もない老人たちがウロウロしているでしょう。自分だけの安泰を一生の願いとし、隣人も、社会も、国も考えなかった世界第一の社会保障の国民がどんどん自殺をとげるのは、社会保障という美名の裏をつづる深刻な問題ですよ。

ですから、人間は死の寸前まで公共の為に命を捧げる決意をしてこそ、人生は成りたつものだと信じます」

◇

この紳士の心からなる述懐は、強くわたしの心を打った。旅行中わたしはこのことで考えつづけた。

老後の平安、老後の安泰…他人はどうでもいい、社会保障制度のおかげで、パンと水と家とさえあればいいんだ、という考え方で老齢に達して満足するものがあるならば、ストックホルムのあの有名な〝自殺の崖〟から投身したまえ。

この話を九月二日夜八時にしんみりと妻にした。

わたしはいった。「オレはそういう生涯を送る決意をした。権威も、地位も、富もいらん。一本のタバコを半分にさいても、隣人に半分を与えてやりたい！」

妻は即座にはっきり答えた。

「わたしは、たとえ貧民くつに落ちても、あなたに殉じます。それがあなたの生れ持った性分であることはよくわかっています」

この瞬間、わたしは心のなかで妻に合掌した。そしてそれが三十何年の結婚生活における妻にささげた最高の尊敬の瞬間であった。

―九月六日記―　（兵庫県知事）